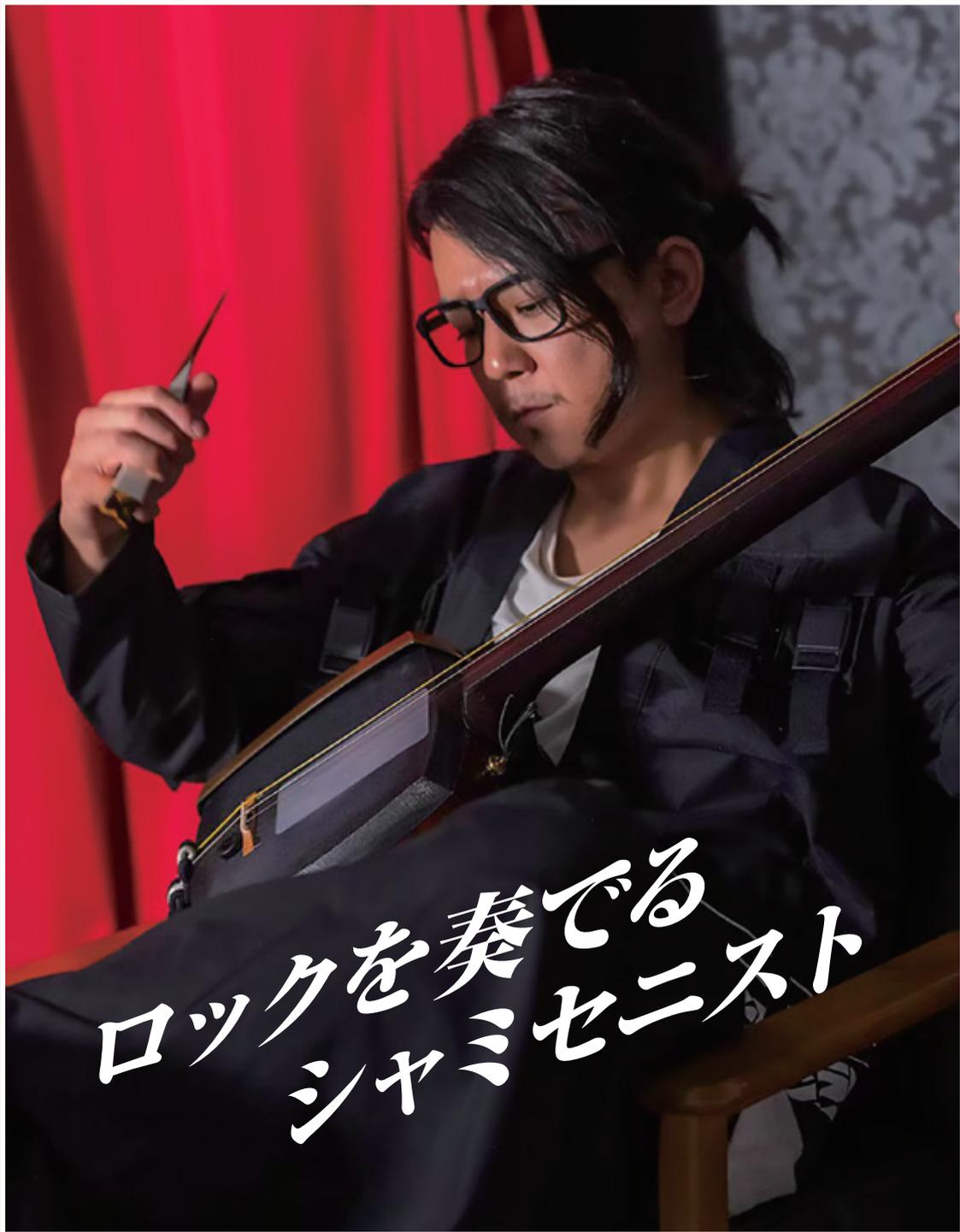


文化情報誌

たわわ

2023 No.120

「たわわ」というタイトルには「小さな情報がたくさん集まって多くの実を結ぶように」という期待が込められています。



ロックを奏でる
シヤミセニスト

シャミセニスト

寂空-JACK-さん

中学3年生の時にギターを始め、高校では軽音楽部でロックバンドを組み、ベースを担当していました。自分の性格上、何かをやり始めるととことん追求しないと気が済まないのが、メジャーデビューしたい、さらには世界に行きたいと思っていました。だけど、日本人に生まれてギターやベースで世界を目指してもインパクトが弱いのではないかと考えました。

実は、祖母が民謡を歌っていて、幼少の頃は田舎に帰るとよく祖母の歌を聞いていました。また、高校生の頃ラジオで聞いた津軽三味線プレイヤーの上妻宏光さんの演奏が印象的で、そのフレーズがずっと自分の中で鳴り響いていました。そして、成人を迎える頃バンドが解散して一人になり、どうしようかなと考えていた時に「そうだ！三味線をやってみよう」と思いました。

とはいえ、三味線は敷居が高いので、最初はベースで三味線風のフレーズをまねて弾いていましたが、21歳の誕生日を迎える頃、祖母からリサイクルショップで安く三味線を買っていることを教えてもらい、ついに三味線を購入しました。現在まで三味線でロックを演奏するスタイルを売りに活動してきましたが、いつも心の奥底には祖母が歌っていた民謡がバックグラウンドとして響いていたと思います。

三味線を始めて、平塚の梅屋にあった高橋流の三味線教室に通い始めました。ありがたいことに、半年くらいで師匠と共にプロの現場に立つこともでき、熱海の後楽園ホテルで「帰ってこいよ」で有名な松村和子さんの伴奏もやらせていただきました。その後も何人かの師匠に師事し、三味線を始めて5、6年たった頃に大きなチャンスを得ました。それは、富士市の自動車学校の方から「交通安全事故撲滅コンサートで、秋川雅史さんの前座をやってもらえないか」というものです。1600人程度の前での演奏で、当時の師匠にはまだ早いと忠告されたのですが、その時僕は悩んだ末出演を選び、プロ奏者として活動を続けていく上でとても良い経験となりました。

僕は自分のことを「シャミセニスト」と呼んでいます。三味線を始めて1年くらいでつけたオリジナルの呼び方です。バイオリニストがいるのだから「シャミセニスト」がいてもいいじゃないかと。響きがいいし、単に古典をやっている人じゃないという印象も伝えられるかなと思っての命名でした。海外でも「シャミセニスト」と皆さんに呼んでもらっています。

「寂空」という名前は、実は中学時代のあだ名からきています。当時あるきっかけで「ジャック」と呼ばれるようになり定着しました。自分でも気に入っていて、音楽で身を立てるなら本名よりも「ジャック」の方がインパクトがあるなと思っていました。その後、三味線奏者として漢字表記の方が格好いいと思い、最初は「寂」一文字で、その後直感で読み方は「ジャック」のまま、「寂

空」にしました。すると、急に活動の幅が広がり、今年はフジロックにも出演させて頂きました。

生まれは静岡ですが、小学3年生から平塚で過ごしたので、人生の大半を過ごした平塚を故郷だと思っています。音楽を作る上でも、特に平塚の海や山などの自然から受けた影響は大きくて、僕の「空空」という曲は、まさに平塚で自転車を漕ぎながらできました。

20代から30代前半にかけて東京を拠点にしていたのですが、コロナ禍で実家に帰る機会が増え、平塚ゆかりのアーティストが集まった伝統芸能と音楽の祭典「平塚万博」に音楽監督として参加するなど、お蔭様で平塚とのご縁がここ数年で増えてきました。海外に行く機会も増えて、改めて故郷があるのはいいなと感じることが多くなりました。



2022年「平塚万博」演奏の様子

今後は、「平塚万博」を平塚の風物詩となるようにしたいです。5年後、10年後には、七夕まつりのように平塚を連想させるイベントにしたいと思っています。それから海が好きなので、平塚の海をイメージできるような楽曲を書き上げて平塚海岸で演奏したいです。

さらに世界にも目を向けたいです。最近3か月くらいインドに音楽を学びに行きました。インドのシタールという楽器は、ビートルズやローリングストーンズなどが取り入れて一気に世界に広まりました。同じように、三味線も世界のアーティストに使ってもらえる魅力がある楽器だと思います。三味線が世界に広がる一端を担えるように、シャミセニストとして活動していきたいです。大きな夢を抱くのが自分の性格なので、ロックから三味線に行きついた自分ならではのストーリーを大事にして、これからも三味線の魅力を伝えていきます。

【プロフィール】

寂空-JACK-(ジャック)

1984年静岡県生まれ、平塚育ち。現在は東京を拠点にワールドワイドに伝統の枠をはみ出した活動を展開している。神社仏閣での演奏から、ライブハウス、ロックフェスティバルに至るまで、ジャンルレス、ボーダーレスで活動を展開している。平塚では、ひらしん平塚文化芸術ホール「オープンライブSPECIAL」のほか、「平塚万博」(2022年11月3日中央公民館、2023年10月1日ひらしん平塚文化芸術ホール)に出演。



巡って学ぶ平塚学入門 ⑧

「大堤」

金目川は河床が高く、比較的急流のため、江戸時代には記録に残るだけで10年に1度の割合で洪水が発生し、金目川の治水は地域の死活問題でした。

文禄4年（1595）、徳川家康が平塚周辺へ鷹狩に訪れた際の休憩所とされていた豊田本郷の清雲寺が洪水の被害を受けました。これにより翌慶長元年（1596）、家康は代官頭の伊奈忠次に命じて、水害を避けた砂丘上の中原の地に中原御殿を造営するとともに、大堤のほか金目川通りの堤防を普請させました。金目川の堤防普請は、洪水に苦しむ金目川周辺村民を徳川家康が、憐れんだことによると伝えられ、金目川最大の堤防である平塚市南金目の大堤は家康への敬意を込めて「御所様御入国以来之堤」「御所様堤」とも呼ばれます。江戸時代の金目川の治水事業は、家康の命により中原御殿造営とセット事業として始まったのでした。

金目川通りの堤防の維持・修復は、金目川の水

を利用する村々で構成される「金目川通り28か村組合」により担われ、村々は幕府へ徳川家康の由緒を主張して普請への助成を求めました。

現在、平塚市は県下第一の米の生産量を誇る農業都市といえますが、その基礎には徳川家康による大堤の普請など治水事業があったのです。

（平塚市博物館学芸員）



現在の大堤



描かれた江戸時代の大堤
（北金目村絵図 平塚市博物館寄託）

ひらしん平塚文化芸術ホール 主催事業レポート Vol.2

ひらしん平塚文化芸術ホールで実施している、様々なジャンルの事業の様子をお届けする主催事業レポート。今回は、「親子・KIDSシリーズ」から、令和5年5月5日に開催した「to R mansion『へんてこうじょう』」をご紹介します。

このシリーズは、子どもから大人まで楽しめる演劇やミュージカルを中心に、感動や驚きに包まれる舞台作品を上演し、子どもの頃から舞台芸術に触れる機会を提供します。

「to R mansion」は世界各国の演劇祭やストリートフェスティバルで活躍するパフォーマンスカンパニーで、東京2020オリンピック開会式にも出演しています。

「へんてこうじょう」は、工場長と愉快的仲間たちが、夢とロマンを組み合わせ、へんてこな物を沢

山作る工場で巻き起こる観客参加型ステージアートです。色々な絵が描かれた鮮やかな箱に、演劇、ダンス、音楽、絵画など、多様な要素が組み合わされた舞台はまさに総合芸術。オリジナルダンス体操で体を使って表現したり、会場から光を使って地図を浮かび上がらせたりするなど、客席とコミュニケーションをとりながらストーリーが展開し、会場は子どもも大人も大盛り上がりでした。

終演後のアンケートではこのジャンルの公演に初めて参加したという方が7割以上で、「だいたくしょう!」「大人も楽しめた」といった声も多くなりました。親子で楽しめる「親子・KIDSシリーズ」はお子様のホールデビューにも最適です。来年度も感動と驚きの舞台芸術をお届けしますので楽しみにしてください。



リトアニアに行く前に… 「リトアニアの民族衣装」

平塚市は、リトアニア共和国の第二の都市であるカウナス市と、姉妹都市提携に向けて様々な交流を続けています。今回は、カウナス市出身のジュギーテ・サウレさん（平塚市国際交流員）が、母国の民族衣装を紹介します。

リトアニアの民族衣装は、文化、民族性、歴史の流れを表すものであり、国の重要なシンボルでもあります。昔、リトアニア民族は5つの地域に分けられていました。地域ごとに独特な柄や色、アクセサリ等で個性を表していることが大きな特徴です。現在作られている民族衣装は、19世紀後半から20世紀前半の村人の服装に基づいたものです。

リトアニアの民族衣装は、ウールやリネン、綿で織った生地で作られています。男性の衣装は落ち着いた色を使い、アクセサリもほとんど使いません。ただひとつ欠かせないものとして、ユアスタ（リトアニア語でjuosta：写真1にある腰から下げられた帯）を腰に結んでいます。このユアスタにデザインされた柄やシンボルには、ひとつひとつ意味があり、織った人が語りたかったことを表しているという大きな役割を担っています。昔は、ユアスタを人と神の絆、厄除けの意味で捉えることが多かった為、結婚式、葬式などの時に、腰の辺りに結んでいました。



写真1 ユアスタを腰に結んだ
ズーキヤ地方の民族衣装

民族衣装は、リトアニア文化の大事な一部であり、今でもリトアニアの祝日や祭りでよく着られています。皆さんも、リトアニア文化の多様性と歴史の深さに注目してみてください。



リトアニアの5つの地域

一方、女性の衣装は、とても多様な色や柄、アクセサリが使われています。リトアニアの伝統的なアクセサリは、世界有数の産地であるバルト海の琥珀が使われています。リトアニアの民話では、琥珀はお守りのように身に付けると、病気の予防や厄除けの効果があると言われています。また、他にもスカーフやカルーナ（リトアニア語でkarūna：リトアニア独自の王冠にリボンをつけたもの。写真2）等、頭に被るアクセサリがあります。昔は、被るアクセサリの種類によって、その女性が結婚しているかどうか分かることもあったそうです。



写真2 カルーナを被った女性
が踊っている様子



ジェマイティヤ地方の
民族衣装

平塚市文化振興基金に御協力を

平塚市文化振興基金は、市民文化の振興を図るために活用されています。基金に御協力くださる方は、平塚市文化・交流課まで御一報ください。

発行 平塚市文化・交流課 | 〒254-8686 平塚市浅間町9-1

電話 0463-32-2235 FAX 0463-21-9756 E-mail : bunkoh@city.hiratsuka.kanagawa.jp

令和5年(2023年)10月15日発行 右の2次元コードより文化情報誌「たわわ」へアクセスできます

